

報告

コロナ禍のジュニアセッションへの影響

～コロナ禍はジュニアセッションに何をもたらしたのか～

篠原秀雄（埼玉県立草加南高等学校）、
日本天文学会ジュニアセッション実行委員会

1. はじめに

2020年に始まったコロナ禍で、ジュニアセッションも大きな影響を受けた。コロナ禍前は参加者が会場に集まって実施する対面形式のみであったが、コロナ禍以降はZoomを利用したオンライン形式が加わるようになった。本稿では、このオンラインセッションの導入が、参加グループおよび運営サイドに対してどのような影響を及ぼしたのかを報告する。

2. コロナ禍によるセッション形式の変化

表1は、コロナ禍前の2018年からコロナ禍を経た2025年までのジュニアセッションの開催概要をまとめたものである。

表1 コロナ禍前後のセッションの概要

開催年	開催地	開催月日曜	開催形式	発表総数
2018	千葉大学	3/17(土)	現地	74
2019	法政大学	3/17(日)	現地	56
2020	筑波大学	3/19(木)	中止	63
2021	オンライン	3/20(土)	OL	50
2022	オンライン	3/19(土)	OL	60
2023	立教大学	3/14(火)	HB	57
2024	東京大学	3/12(火)	HB	57
2025	水戸市民会館	3/20(木・祝)	HB	63

OL：オンライン形式

HB：ハイブリッド形式（現地＋オンライン）

2020年のコロナ禍によって、この年のセッションは天文学会本体のセッションも含めて中止となった。その後の2年間はコロナ禍が収まりを見せず、完全オンライン形式による開催が続いた。

コロナ禍が落ち着きを見せ始めた2023年に、立教大学池袋キャンパスを会場として3年ぶりとなる対面形式のセッションが復活した。コロナ禍前のセッションとの大きな違いは、現地参加のみではなくオンライン参加も含めたハイブリッド形式となったことである。

表1を見ると、この数年の発表総数はおおむね60件前後で、コロナ禍を経ても大きな変化はなく、ほぼ一定になっていることがわかる。

なお、発表総数の変動の大きな要因としてあげられるのは、年会本体の開催日程である。表にまとめた2018年以降では、開催期間が3月半ば～後半で、このあたりだと主な参加団体である高校においては、高校入試や学年末考査が一段落している場合が多く、比較的参加しやすい。しかし、2026年の天文学会の春季年会の開催日程が3月4～7日となっており、この期間にジュニアセッションを開催する場合、多くの学校で考査や入試などの重要な行事と重なり、参加が困難になることが予想される。来年については、ジュニアセッションの開催日程が重要な検討課題となる。

3. オンライン形式導入の意義

3.1 参加グループから見たハイブリッド形式の意義

表2は、参加校を「関東」と「関東以外」に分けて、参加形態ごとに参加校数を集計しその推移をまとめたものである。

2018年～2025年の春季年会は、オンライン以外の開催地はすべて関東地方であったこ

とから、この区分によりほぼ同じ条件で現地参加のしやすさを比較できると考えた。

なお、表 2 の地域別の参加校数は、基本的に高等学校（部活動）での参加のみを数えている。研究機関が全国に募集をかけて研究活動を行う参加グループ（「もし天」や「銀河学校」など）については、参加者の居住地域が全国に散らばる傾向があるので、表 1 の参加総数には入れているが、表 2 の地域別の集計からは除いてある。

表 2 関東／関東以外の参加形態の推移

開催年	開催形式	関東			関東以外			合計		
		現地	P	OL	現地	P	OL	現地	P	OL
2018	現地	15	2		17	5		32	7	
2019	現地	12	2		14	0		26	2	
2020	中止	13	2		12	2		25	4	
2021	OL			12	0		14	0		26
2022	OL			18	0		20	0		38
2023	HB	8	4	2	8	2	9	16	6	11
2024	HB	15	2	0	11	2	5	26	4	5
2025	HB	15	2	1	11	1	7	26	3	8

※ 現地：現地参加

P：ポスターのみの参加（現地不参加）

OL：オンライン参加

2019 年以前は現地参加が原則であり、事情により現地に参加できない場合のみ、事前に送付されたポスターを掲示するという参加形態（表中の「P」欄）である。

2020 年はセッションそのものが中止となったことから、予稿集に掲載された講演を「参加」と見なして集計している。

この表を見ると、ポスター掲示のみのスタイル（表中の「P」欄）の参加数は、コロナ禍の前後で、関東もそれ以外も大きな変化は見られない。

一方、コロナ禍に始まった口頭発表をオンラインで行う形式（表中の「OL」欄）の参加数を見ると、対面形式が復活した 2023 年以降は、「関東」ではわずかな数にとどまってい

るが、関東以外では一定数の参加が継続している。

遠隔地からの参加が困難な学校について、このオンライン形式が有効な参加スタイルになっていることが推測できる。

完全オンライン形式で実施した 2021 年の参加者への事後アンケートを振り返ってみると、「今後状況が改善した場合に希望する参加形式」についての質問に対して、「会場に行って発表」が半数を超えてもっとも多かったが、「近ければ会場で発表」が 3 割、「リモートで参加」が 2 割となっていた[1]。「近ければ会場で発表」は裏を返せば「遠ければリモートで参加」ということでもあり、今回の集計結果はその回答の傾向の現れと考えることもできそうである。

遠隔地で現地参加ができない、あるいは参加が困難だった学校が、オンライン形式を取り入れることにより参加できている状況が見えてくる。高校生にとって、対面形式によるセッションが重要であることは確かだと考えるが、現地参加が難しい場合にもオンライン参加を可能にするハイブリッド形式は、参加の可能性を広げる非常に有意義なセッションスタイルであるといえるだろう。

3.2 運営側におけるハイブリッド形式の意義

コロナ禍で変更を余儀なくされたのは、セッションそのものの運営形式だけではない。毎年 2 月上旬には、実行委員・世話人が集まって、当日の運営方法を議論するプログラム編成会議が開かれている。

コロナ禍が始まった 2020 年は、ぎりぎりで対面形式での会議ができたが、翌 2021、22 年はこのプログラム編成会議もオンライン形式で実施せざるを得ない状況になった。これにともなって、それまで紙ベースで確認をしていた予稿原稿も、すべてオンラインストレ

ージ (Google Drive) 上にデジタルデータで置かれたものを確認するスタイルになった。

対面形式の会議が復活した 2023 年以降は、オンライン参加を含むハイブリッド形式になり、都合があわず現地参加ができない委員・世話人もオンラインで参加しやすくなっている。そして会議の場でも、運営に関する議論や予稿原稿の確認などが、現地参加とオンライン参加のメンバー間でほぼシームレスに実施できていると感じる。

4. おわりに

ここまで見たように、現地での対面形式に加えてオンライン形式を併用したことで、セッション本体でも、そして運営側の会議においても、参加する側のハードルを大きく下げる効果があることが実感できる。

一方で、現地参加とオンライン参加のハイブリッド形式での運営は、当然であるが運営サイドに大きな負荷がかかる。もし、コロナ禍という外的要因によるオンライン開催の経験がなかったら、ハイブリッド形式による開催は実現しなかったか、あるいは実現したとしても、もう少しあとのことになったのではないだろうか。

もちろんコロナ禍のような災厄はない方がよいのは当然である。しかし、起こってしまった災厄に対応し困難を克服していく中で、新たな形式による運営スタイルを実現することができたことは、一つの成果として大きく評価できることであろう。(コロナ禍の苦労なんて二度と味わいたくはないが。)

文 献

- [1] 篠原秀雄, ジュニアセッション実行委員会 (2021)「天文学会ジュニアセッションの報告 ～初のオンライン開催の経緯と成果～」, 天文教育, 37(4): 73.
https://tenkyo.net/kaiho/pdf/2021_05/04repo-01junior.pdf



篠原 秀雄